

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園番号	
園名	東京都北区立浮間保育園

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

当園は、園庭や周辺地域に四季折々の木々が豊かに生い茂る自然環境に位置しており、近隣には土手や浮間公園といった自然豊かな公共スペースもあり、子どもたちが日常的に多様な自然事象に触れる機会が多い環境である。春夏には虫取りをして観察をしたり、草花を摘んだり、秋には近隣の公園でどんぐり拾いをしたりして遊びの中で自然に触れている。その環境の中で様々な疑問や発見を見つけたり、探求心を深めたりしていきたいため。

### 2. 活動スケジュール

4月～

- ・園庭や散歩先で春の自然（虫、草花）に触れ、生き物や植物への好奇心を育む。
- ・図鑑で調べたり、発見マップを作成したり、「もっと知りたい」という探究心を育む。

6月～9月

- ・草花や葉から色が出る不思議を感じ、自分なりに「色を作る」という実験・探究を楽しむ。
- ・色を混ぜる、濃淡を変える、量を変えるなど、試行錯誤（失敗・成功）を経験して学ぶ。

### 3. 探究活動の実践

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定

#### 【素材や道具】

- ・花、野菜、果実、葉、木の実など
- ・ジップロック、すりこぎ器・すり棒、棒、おろし器、セリーカップ、スポイト、キッチンペーパー、コーヒーフィルターなど

#### 【環境構成】

- ・子どもたちの気づきや発見を整理できるよう、「素材」「抽出方法」「結果（色が出たか・出なかったか）」を一目で確認できる記録表を用意した。
- ・一覧表を掲示し、自分たちの経験を振り返ったり友達と比較したりできる環境を整えた。

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、教諭との関わり等)

・家庭から持参した野菜、給食の調理過程で出た野菜や果物の皮、そして園庭で見つけた自然物を素材として活用し、色水作りを行った。花や実など「〇〇色が出るかもしれない」と予想した素材を種類ごとにトレイへ準備し、揉む・すりつぶす・叩く・煮出すといった様々な手法を用いて、素材に合った色の抽出方法を模索した。

・紫キャベツやピーズを煮だした時の色やそこに酢を入れた時の還元反応を見せ、新しい色だし方法があることを紹介した。

・試行錯誤を繰り返す中で、「ピーマンの赤と黄色は出るのに、なんで緑は色が出ないのかな？」と疑問を持ったり、「水を入れすぎると色が薄くなるから気をつけて」と教え合ったりする姿が見られた。思い通りの色が出た喜びだけでなく、想像と異なる結果になった際にも、それを新たな発見として受け止め、子ども同士で経験を共有しながら次への意欲や探究心につなげていた。



#### 4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・さまざまな自然物や道具を使い、自ら試行錯誤することで、『うまくできた』『色が出なかった』『想像した色とは異なっていた』など、子ども自身が多くのことを発見できていた。自分で素材を選び、時には失敗を経験したからこそ、次への意欲や探究心につながったのではないかと感じている。また、食材を使用する中で『もったいない』という声や、『混ぜたらどうなるか』という疑問も聞かれた。今後は、子どもの興味に合わせて食材の使用や混色の実験などを行ってきたい。

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園番号	
園名	東京都北区立浮間保育園

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

・園庭や土手、緑豊かな公園といった、日常的に自然と触れ合える恵まれた環境を活かし、子どもたちは四季折々の草花や実を遊びに取り入れることを楽しんでいる。現在、友達と同じ目的を持って遊ぶ楽しさや、身近な物を別のものに見立てる想像力が豊かになってきたので、自然物を活用した「キャンプごっこ」を取り入れて、「これをお肉に見立てよう」「葉っぱをお皿にしよう」「焚き火ができる場所を作ろう」と友達同士でイメージを共有して遊ぶ中で生まれる小さな気付きや「もっとこうしたい」という思いをお互いに受け止め、みんなであれこれ試しながらワクワクする遊びを充実させたいと考えた。

### 2. 活動スケジュール

#### 【① イメージを広げ、素材を集める】

- ・土手や公園で「キャンプに使えるような宝物」を探す（どんぐり、花、実、枝、つる、落ち葉など）。
- ・見つけた素材を子どもたちと種類ごとに分類（素材コーナーの設置）し、いつでも使えるようにする。
- ・友達の体験談を聞いたり、写真や絵本をヒントにしたりして「テントは必要かな?」「火はどうする?」「ピザはどうやって作る?」と話し合い、必要なものをリストアップして期待感を高める。

#### 【② 試行錯誤とイメージをカタチにする】

- ・「焚き火・BBQ」「キャンプ飯作り」「森のカフェ・アイス屋さん」「ピザ屋さん」など、自然物を使った見立て遊びを展開する。その中で「枝がうまく立たない」「お肉に見えるものがない」といった失敗や困りごとを、保育士も一緒に面白がり、「どうすればいいかな?」と問いかけ、工夫や再挑戦を促す。

#### 【③ 共有とコミュニケーション】

- ・キャンプ場にお客さん（他クラスや保育士）を招待し、自分たちのこだわりやおすすめメニューを伝えたり、注文をとりながらやり取りを楽しんだりする。
- ・楽しかった瞬間や「これを発見した!」というエピソードを振り返る時間を作り、クラス全体で共有し、「自分たちの遊びが認められる喜び」につなげる。

### 3. 探究活動の実践〈活動の内容〉

#### ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・自然物を利用した遊びを充実させるために園庭の一部に屋根をつくり、その場所をお店やテントなどに見立てて遊べる場を設ける。
- ・多様な自然物を【木の実(どんぐり、まつぼっくり、カラマツ、エゾマツ、ヤシャブシ、メタセコイヤ)、枝、皿、コップ、スプーン、緩衝材、ざる など】を種類別にワゴンに収納し、「使いたい時に、使いたい場所へ」自分たちで運べるようにする。素材を種類別に分けることで、子どもたちが形や色の違いに気付き、目的に合わせて選択できるようにする。
- ・網、トング、シェラカップ、ざる、スプーンなどの道具を揃えることで、キャンプのイメージを具現化し、「自然物×道具」の組み合わせによる試行錯誤（挟む、すくう、焼く真似など）を引き出す。

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、教諭との関わり等)

- ・園庭の屋根の下を拠点に「キャンプコーナー」と「カフェコーナー」を展開。ワゴンから自由に素材を選び、トングや網などの道具を組み合わせ、自分たちでイメージしたキャンプの場を構成して遊ぶ。
- ・それぞれが見立てながら遊びはじめる。どんぐりをコーヒー豆にしてドリップコーヒーを作ったり、木の枝に緩衝材をさしてマシュマロを焼いたりして、キャンプの経験を遊びに反映させる姿があった。また、カフェでの調理中、どんぐりの皮を剥くことで「中に実が入っている！」と発見し、自然物の成り立ちに興味を示したり、自分の目的に合う素材を探す中で、「あっちのお店にちょうどいい形の実(素材)が売っていいよ」と友達に教えたりして、自然物の形や色の違いを認識して遊びに活かす姿が見られた。
- ・(保育者の関わり) 焚き火に見えるような環境設定(赤い葉や枝の配置)をさりげなくサポートした。どんぐりの中身に気づいた瞬間を捉え、「本当だ、何色かな?」「どんな匂いがする?」と問いかけて、発見をさらに深められるよう関わった。さらに、お店同士のやり取りが生まれるよう、「あっちのお店は何を売っているのかな?」と興味を繋ぐ言葉がけを行い、情報の共有を促した。



#### 4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・普段の生活で使い慣れているお皿やトングなど「本物の道具」を遊びの中に用意したことで、子どもたちの「やってみたい！」という気持ちや想像力が、一気に膨らんでいくのを感じた。そして、使い慣れた道具がきっかけ（入り口）となって、そこに自然物を組み合わせることで、「これをお料理しよう」「コーヒーを入れようかな」と、一人ひとりのイメージが次々と形になり、友達と「楽しさ」を分かち合えるようになっていく姿も見ることができた。
- ・はじめはキャンプやカフェのイメージがわからない子もいたが、楽しそうに遊ぶ友達の姿を真似していくうちに、少しずつ自分なりのイメージが持てるようになっていた。面白いと感じたことは、イメージがはっきりしてくると、子どもたちの目がより細やかになり、「この形がちょうどいい」「このどんぐりは〇〇にいいんじゃない」と、自然物の形や色、感触などへ意識が向き、自分で想像を膨らませ、イメージに沿ったものを選び、利用するようになっていた。
- ・キャンプごっこを繰り返し遊ぶ中で、「こたつをつくりたい」と新たな提案も出てきて、それを形にしようとする子どもたちのやりとりする姿が面白かった。
- ・遊びの中での「あ、これいいな！」「中身はどうなってるんだろう？」という一つひとつの小さな発見が積み重なることで、自然物への興味関心がどんどん広がり、さらに深い観察へとつながっていくという事が感じられた。

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園番号	
園名	東京都北区浮間保育園

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

◎自然◎

- ・冬の虫に興味や関心を持ち、探求心が高まる。

<テーマの設定理由>

・園庭や周辺地域の自然環境に恵まれ、春から秋まで子どもたちは日常的に虫探しや飼育を楽しんでいる。しかし、だんだん寒くなると虫の姿が見えなくなったことで、子どもたちから「冬になると、なんで虫がいないのかな？」という素朴な疑問が聞かれるようになった。「死んじゃったのかな？」「どこかに隠れているのかも！」といった子どもたちの不思議だと感じている問いに着目しながら、様々な発見や気づきを一緒に探究していきたいと考え、冬の虫探しを計画した。

### 2. 活動スケジュール

春～秋

- ・バッタやカマキリ、セミ、カナブン、ちょうちょ、とんぼなどを捕まえたら逃げていかないうちに虫カゴに入れて観察したあとは、逃がしていく。

9月下旬 虫ハウスを園庭に設置する

- ・捕まえてきた虫たちを広い空間に放し、その虫たちの自然な姿を観察して楽しむ。
- ・虫たちが死なないためにどんなエサが必要なのか？図鑑で調べて用意して飼育する。
- ・寒くなる冬は、なんで虫の姿が見えなくなるのか？を話し合ってみる。

12月

- ・虫専門の講師と打合せを行い、『冬の季節の昆虫はどこにいるの？』とテーマを設定し、虫ハウスの様子や周辺の公園を散策しながら当日のスケジュールを話し合った。
- ・4、5歳児クラスの子供達から事前に「虫に関する質問」を聞きとり、講師より当日回答をしてもらう。

1月

- ・子どもたちの問いを解決するために、板橋区立教育科学館から虫の専門講師を招聘する。
- ・『虫博士と遊ぼう！』という活動を行い、講師から虫についてのクイズや豆知識を聞き、その後、近くの公園で虫の探索活動を一緒に行う。

### 3. 探究活動の実践

- 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

#### 【素材や道具】

- 虫博士の自己紹介に使用→プロジェクターやスクリーン、音響(マイク)。  
※講師はパソコンや虫、本、標本、虫捕りのアイテムを持参する。
- 公園での虫探索→虫ケースやマイナスイライバー、懐中電灯、虫眼鏡、スコップ。

#### 【環境構成】

- 保育園周辺の公園や土手を事前に散策し、虫が一番発見できそうな公園を選定しに行く。
- 講師の話が聞きやすく分かりやすいように音響(マイク)、プロジェクター、スクリーン

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、教諭との関わり等)

- ホールで虫博士(かわぐちー)の自己紹介やクイズに参加する。米粒2つ分の大きさのクワガタがいる事を知り標本を見せてもらおうと「本当だー。米粒くらい小さいね。」と驚く子ども達の姿があった。持参してくれた標本や本物のオオクワガタ・ヘラクレスオオカブトやニジイロクワガタを実際に見ると、「大きいなー」「クリスマスツリーに飾りたくなるくらいきれいな色。」と興味津々だった。
- 公園で博士と一緒に虫のいそうな場所のポイントを教えてもらい探し始めると、カマキリの卵、ハサミムシ、カタツムリなどを発見し「見つけたー。」「これは何の虫?」と大喜びしていた。
- 昆虫採集をする時のアイテムも教えてもらい懐中電灯と虫眼鏡、スコップ等道具を持って虫ハンターになりきり夢中になっていた。見つけた虫や卵はどうか?と声をかけると、「育てたい」ということになり、この寒い時期の育て方を講師の先生に聞いていた。
- 年長児は、事前に質問したことに答えてくれる時間があり、スクリーンを見ながら興味を持って聞いていた。昆虫の視力は弱くモザイクがかかっているように見えている。だから触覚をアンテナにして上手に歩けることを学ぶと、子ども達から「触覚のない昆虫はいるの?」「もし、触覚が取れちゃったらどうなるの?」と次々に疑問に思う事を質問していた。



#### 4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- 今まで冬の時期、虫はいないのが当たり前という固定概念から「虫探し」を活動に含めてこなかった。子どもたちも虫を目にすることが無くなっていくので興味関心も薄れていた。今回、子ども達の何気ない問いをきっかけに、なぜだろう？と一緒に調べてみると、冬ならではの虫たちの姿や生態などについて新たな気づきが多く得られた。子どもの好奇心に寄り添うことで、当たり前だと思っていた景色の中に新しい学びが隠れていることを実感できた。
- 虫先生に冬の虫探しのコツを教えてもらいながら「虫たちはどこで冬を越しているんだろう？」と想像力を膨らませ、木の表面、朽ちた切り株、湿気のある土、枯れ葉の下など、普段はあまり目を向けない場所をみんなで真剣に探索していく中で、子どもや保育士の好奇心が高まり、冬の虫探しの楽しさを味わえた。
- 隠れていた虫を見つけた時の、あの目を輝かせた感動的な表情を見ることができてよかった。子どもたち一人ひとりの「見つけた！」という喜びが伝わってきて、自然の中で五感を使って学ぶことの素晴らしさを改めて感じた、とても良い経験となった。
- 冬でも虫がいる事や隠れている場所、姿が違う事など学ぶ事ができた。
- 虫が苦手な児も虫博士と探す事で面白さを味わっていた。今後、冬の季節の虫探しを遊びに取り入れる良いきっかけとなった。見つけた虫は、飼育方法を子どもと考えながら、育てていき、春先に虫ハウスで誰でも観察できるようにしていきたい。